

入谷朝顔まつり：歴史

毎年恒例の「入谷朝顔まつり（アサガオの祭り）」は、入谷地区にとって不可欠の行事であり、7月には3日間の開催期間中、最大40万人が参加します。祭りは、花産業の中心地としての入谷の歴史を讃えるものです。花産業は1800年代中盤から大正時代初期（1912年～1926年）にかけ、地域で栄えていました。当時、上野高台の東端にある入谷の低地は、その豊かな土壌と数々の民間庭園で知られていました。庭園の植物育種家らは、いっそう魅力的な花の品種を作り出そうと、競い合っていました。試行錯誤の対象として特に人気だったのは、アサガオでした。育種家らは、毎年恒例の花市場で成果を展示し、人気の絶頂期であった1890年代前半には、来場者があまりにも多く、辺りの交通が止まってしまったほどです。

1910年～1920年代には、経済的な苦境に立たされ、好みが変わったことで、花産業は衰退を迎えました。入谷のアサガオ市場は大衆の想像から消え去り、第二次大戦末期には、焼夷爆撃により地域は完全に破壊されました。アサガオは、その後に悲劇から立ち直るための励みになりました。大戦終結からわずか3年後の1948年、地元民が集まり、街の復興を讃えるために花市場を復活させました。それ以来、入谷朝顔まつりは毎年開催され、今は7月6日から8日にかけて開催されています。祭りの中心となるのは入谷鬼子母神で、朝の5時から、およそ50軒の花屋台が営業を始めます。現在販売されているアサガオは、1800年代に人気だった独創的な品種ではなく、馴染みのある円形の品種が主です。